

「永遠のいのち」とともに

清川 泰司神父

コロナ禍により、去年2月26日の「灰の水曜日」後、約2か月間、公開ミサの中止を余儀なくされました。あれから一年が経ち、大阪教区の感染予防の指針に従い、なんとか公開ミサを行っています。この公開ミサ開催を可能にしているのは、ひとえに、感染予防に関わって下さっているスタッフの協力、そして、信徒の皆様の配慮によるものです。感謝申し上げます。

公開ミサができなかった間、新型コロナウイルスにともなう生命の危険と、キリストへの信仰における「永遠のいのち」について随分考えさせられました。信徒の中にも、ミサに参加できないことで、生命の大切さを理解しつつも、ご聖体を頂く事によりもたらされる「永遠のいのち(キリスト)」との交わりの大切さを見出した人もいます。

キリストが世に示した「いのち」は、生存だけの命ではなく、人間の生死を越えた「永遠なるいのち」です。聖書全体と、教会の伝統を通して、神の愛を理解すると、人間は不完全で、弱く、狭く、そして死を迎える不完全な存在です。その不完全な生命は、完全な愛であり、永遠なるいのちである「神の御心」を生きた「キリストの体(ご聖体)」をいただく事により、神と共に生きる道に導かれます(復活のいのち)。そして、ミサ全体の営みにより、清められ、生死を超えた新たなる道が整えられるのです。この「いのちの営み」により、地上に住む不完全な人間同士は、神のいつくしみの下で、赦し合い、愛し合い、御国(神の支配の国)の実現の希望を持つのです。そして、神の愛により生まれ、死を迎えた時、御国(天の国)で「神の御心」と完全に繋がる喜びに満たされるのです。この永遠なるいのちの営みを理解し、信じ、人生を歩むのが、カトリック信者の信仰の基礎と言えるでしょう。

コロナ禍で、神と人、人と人との関係が断ち切られているように感じている人もおられるでしょう。しかし、本当の信仰は、むしろ、このような時に試されるのです。カトリック教会の信仰によりもたらされる恵みは、すべての人を愛する神の愛との交わりです。そして「祈り」により「神の御心」と繋がり、すべての人の救いと、他者・万物(自然)をおもんばかる心が育つのです。この営みが、カトリック教会が伝統的に保持してきた「祈り」の本質であり、そして「祈り」に反映した生き方が求められるのです。

この信仰の営みの基礎であるミサに参加できない時も、神は、永遠にすべての人を愛し育てています。その「神の御心」と繋がる事は祈りにより可能になるのです。その為に、「教会の祈り」があり、「日々の祈り」があるのです。これらのカトリック教会の公式の祈りの文言は、個人の思いを超え、「神の御心」との繋がりを通して豊かないのちに招かれる要素がふんだんに盛り込まれています。この「神の御心」と連動する祈りが、「聖体」を頂く時、この上ない喜びを体験させ、開かれた心が与えられるのです。その喜びを伝える事が、福音宣教の基礎と言えるでしょう。

今後も、このような信仰の喜びに招く、公開ミサを、皆さんと感染予防を講じ継続できればと思っております。また、信仰を新たにする復活祭に向かうこの四旬節の期間、この文面に書いたカトリック教会の信仰の基礎を確認し、喜びを証しする者として、ともに成長してゆくことを希望いたします。

先日、高槻教会では「主の御降誕のミサ夜半(12月24日)」、「神の母聖マリア(1月1日)」を、YouTubeで配信いたしました。300名以上の方にご覧いただいたようです。これからも、多くの方が「神の御心」の豊かさに触れる工夫をしてゆきたいと思っております。

追伸：現役員の任期が終わります。現役員の方々には、2年間、また4年間、役員として神の教会の為に奉仕して下さったことを感謝いたします。新役員については、後日、ご紹介いたします。